

劇台本

『注文の多い料理店 ～山猫軒へようこそ？～』

（上演時間：約20分 / 登場人物：15人）

原作：宮沢賢治 / 構成：学習発表会用（小学校）

学校名：_____

クラス：_____ 担当：_____

上演日：____年____月____日

配役表（キャストシート）

役名	配役（氏名）	メモ
ナレーター1	_____	_____
ナレーター2	_____	_____
紳士A	_____	_____
紳士B	_____	_____
猟犬A	_____	_____
猟犬B	_____	_____
山猫の料理長	_____	_____
山猫の給仕長	_____	_____
山猫のコック1	_____	_____
山猫のコック2	_____	_____
山猫のコック3	_____	_____
札の声1	_____	_____
札の声2	_____	_____
札の声3	_____	_____
森の精	_____	_____

タイムコード（出入りとチャプター）

目安です。歌・所作で±2分調整可。

時刻	チャプター / 場面	主な登場人物（太字は中心）
0:00-2:30	第1幕・森の入口	ナレーター1・ナレーター2・紳士A・紳士B・ 獵犬A・獵犬B
2:30-6:30	第1幕・不思議な看板～導入歌	ナレーター2・ 札の声1・紳士A・紳士B ・（全員：歌）
6:30-9:00	第2幕・最初の部屋	札の声2・札の声3・紳士A・紳士B ・ナレーター1・ 森の精
9:00-12:30	第2幕・次の部屋へ	札の声1・札の声2・紳士A・紳士B ・ナレーター2
12:30-14:30	第2幕・本当に多い注文	札の声3・札の声1・森の精・山猫の給仕長 ・ コック1～3・紳士A・紳士B
14:30-17:00	第3幕・山猫の厨房	山猫の料理長・山猫の給仕長・コック1～3 ・紳士A・紳士B
17:00-20:00	第3幕・救出と学び～合唱	獵犬A・獵犬B・山猫の料理長・給仕長・コック1～3・森の

本文（台本・完全版）

第1幕「森で迷子、看板が呼ぶ」（約6～7分）

[チャプター1：森の入口]

（森の音。舞台に緑の明かり。森の精が風の所作）

ナレーター1「ここは深い森。道は細く、風はすこし冷たい。」

ナレーター2「二人の紳士が、獺にやってきました。」

（紳士A・B入場。獺A・Bは少し先行）

紳士A「山鳥がいないな。森の奥へ行こう。」

紳士B「だいじょうぶさ。ぼくたち都会の紳士だよ？」

獺A「ワン！（先を指す）」

獺B「ワンワン！（奥へ）」

森の精「（ささやく）足もとに気をつけて……。」

ナレーター1「やがて足音は、ふいに止まりました。」

（犬の気配が消える。短い静寂）

紳士B「……あれ？ 犬たちの声がしない。」

紳士A「大丈夫だ。ほら、あれを見て！」

[チャプター2：不思議な看板]

（看板を掲げるスタッフ登場。「西洋料理店 山猫軒」）

札の声1「ようこそ。『西洋料理店 山猫軒』へ。」

紳士A「レストラン？ 森の中に？ いいじゃないか。」

紳士B「ちょうどお腹がすいたところ！」

ナレーター2「二人は扉を開けました。中からは、いい匂い……のような、少し奇妙な匂い……。」

（手拍子の導入の歌：二拍×4小節）

全員「♪ トントン ドンドン 戸をたたく / おなかはグーグー 森のまんなか / ようこそ不思議な
山猫軒 / お約束はあとでね」

第2幕「注文の多い店内」（約7分）

[チャプター3：最初の部屋]

（白い壁パネル。張り紙が多い）

札の声2「お客様へ。本店は『注文の多い料理店』です。まず身だしなみを整えましょう。」

紳士B「注文が多いのは、良いサービスってことだね！」

紳士A「紳士たるもの身だしなみは完璧に。（帽子をとる所作）」

札の声3「帽子と上着はお脱ぎください。ほこりは料理の大敵です。」

（安全のため、帽子とストールを外してハンガーへ）

ナレーター1「二人は言われるまま。なんだか、少しひんやり。」

森の精「（そよ風の所作）ひとつ、ふたつ、命のあたたかさ。」

[チャプター4：次の部屋へ]

（扉パネルを移動。張り紙が増える）

札の声1「くつをきれいに。ピカピカだと、お料理も微笑みます。」

（“磨くふり”でOK）

札の声2「ヘアクリームをよく塗り、髪を整えてください。」

（空のびんで“塗るふり”。観客に見える大きい所作でコミカルに）

紳士B「ぼく、テカテカになってきたよ。」

紳士A「サービスが行き届いている証拠さ。」

ナレーター2「そして、いよいよ“ お料理らしい注文 ” が……。」

[チャプター5：本当に多い注文]

札の声3「顔と手をよく洗い、香水をたっぷり。」

(空のスプレーを“ プシュッ ”。紳士らがむせてコミカル)

札の声1「体に塩をよくまぶし、バターを薄くぬり……。」

(白紙ふぶきで“ 塩 ” の見立て、衣服の外側に振るだけ。バターは“ ぬるマネ ” のみ)

紳士B「……ねえ、A。なんだかおかしくない？」

紳士A「気のせいさ。グルメには下ごしらえが必要なんだろう。」

森の精「(ささやく) ほんとうの“ 注文 ” は、だれのため？」

(奥から山猫の給仕長・コック1～3が影のシルエットで登場)

ナレーター1「背筋に冷たいものが走ります。」

札の声2「最後の部屋では、静かに立ってお待ちください。すぐ“ いただきます ”。」

紳士B「“ いただきます ” って……ぼくらが？」

第3幕「ほんとうの客はだれ？」(約6～7分)

[チャプター6：山猫の厨房]

(不穏なBGM。赤～紫の照明。最奥の扉が開く)

山猫の料理長「ご来店、まことにありがとうございます。本日のおすすめは……“ よく手入れされたお二人 ”。」

紳士A「や、やっぱり……ぼくらが“ 食べられる ” のか！」

山猫の給仕長「当店は“ 注文の多い料理店 ”。お客様に願いを重ね、いちばんおいしい状態で……。」

コック1・2・3「仕上げます。」

ナレーター2「ふたりは、やっと気づきました。」

紳士B「ぼくたち……むやみに偉そうだった。森のルールも礼も、忘れてた。」

紳士A「助けて……！」

[チャプター7：救出と学び]

(遠くで犬の鳴き声。「ワン！」「ワンワン！」)

猟犬A「ワン！（駆け込む）」

猟犬B「ワンワン！（山猫たちに吠える。 追いかける“ 所作 ” のみ)」

山猫の料理長「うむ、犬は苦手だ。撤収だ、撤収！」

山猫の給仕長／コックたち「(あわてて退場。張り紙を片付け、カーテンに消える)」

森の精(所作)「風が払うと、看板は倒れる。」

ナレーター1「たくさんの注文は、煙のように消えました。」

紳士A「犬たち、ありがとう……。」

紳士B「ぼくら、森と命に“ 礼 ” を言うのを忘れてた。」

森の精「気づけばいい。次は、忘れないで。」

(フィナーレ合唱)

全員「♪ ありがとう 森の道／風の声に 耳をすます／いただきますはいのちへ礼／心をそろえ 帰ろうよ」

ナレーター2「こうして二人は、森の外れへ戻っていきました。」

ナレーター1「“ いただきます ” は、食べる側の合言葉。たくさんのいのちへ、ありがとう。」
(全員で礼。幕)